



権現祭のようす（『難波鑑』）

幕府の達をうけて、軒々に提灯が掲げられ、「浪花随一の紋日（祭日）」とされました。

しかし一方で、東照宮は少し違った見られ方もしていたようです。東照宮の修理に携わったある武士の書状では、東照宮を「胡乱」（うさんくさい）と思っている町人がいるため、大坂町奉行所の声掛りがなければなかなか修理費用の寄付がすすまないのではないかと述べています。祭のにぎわいにもかかわらず、東照宮があまり信仰されず、うさんくさい

と思う人々がいたことがうかがわれます。

幕末期になると、大坂に滞在した將軍家茂・慶喜も参拝していますが、徳川幕府が倒れた維新後は同地に造幣寮が設置され、明治6年（1873）に廃社となりました。跡地は現在、造幣局と滝川小学校になっています。維新後は、再び豊臣秀吉が大坂の象徴となっていきます。

この一つの神社の消長には、ときの政権の移り変わりが鮮やかに映しだされている一方、お上の作った神社を「うさんくさい」とみていた大坂の民衆の批判精神も垣間見ることができるように思います。（上田長生）

系図が語る大阪の中世

ある人物の歴史を知る上で、必ず参照される史料が系図です。それは、はるか昔の祖先から、系図が作られた時代の子孫までを一本の線をつないだ、ひとつの家の歴史といえるものです。また、系図にはその家の親族関係だけでなく、だれがいつ何をしたかといったことまで、くわしく書かれているものもあり、史料が少なくてわからないことを補える側面もあります。大阪の歴史の中で、史料が少なく具体的なことがわからない時代が中世、特に鎌倉時代です。そこで大阪の中世を考える際に利用されてきたのが、住吉大社の神主である津守氏の系図や、武士団渡辺党の系図です。彼らの活動拠点である大川流域は、当時「渡辺」と呼ばれました。渡辺党の名称はこれに由来します。

渡辺党は渡辺を名乗る家と遠藤を名乗る家によって構成された武士団であり、渡辺氏、遠藤氏それぞれの系図が残っています。それぞれの系図から、渡辺党が四天王寺や坐摩社など大阪の寺社

『まんが版 大阪市の歴史』発売中！

大人の方から、お子さまで、わかりやすく親しみやすい郷土の歴史です。

発売元：和泉書院 定価1,050円（税込）
本屋さんでお求めください。



と深くかかわりを持っていたことなどが知られます。また、渡辺氏は渡辺「綱」や渡辺「翔」といったように、一文字の名前を特徴としていますが、古文書や貴族の日記には一文字の名前の人物が多くみられます。そうした一文字の名前を、数種類残されている渡辺氏の系図に求めると、渡辺氏がこれまで知られていた以上に、鎌倉時代の朝廷や幕府で活発に活動していたことや、13世紀ごろの大阪天満宮にもかかわりを持っていたことなどもわかってきました。

このように、渡辺党の系図は大阪の中世をより具体的に知ることができる格好の史料となっているのですが、なかには事実と思われぬことも書かれています。鎌倉時代の渡辺氏と遠藤氏は、渡辺の支配をめぐる争いあうようになります。その争いの中で遠藤氏は、自分たちが渡辺氏よりも立場が強かったことを強調する記述をもつ「遠藤系図」をつくります。そこには、実在した渡辺氏の人物を徹底的におとしめるようなことが書かれており、とうてい事実とは考えられないものもあります。例えば、

大阪の歴史第68号 発売中 (1冊700円+送料210円)

【間重富特集】

嘉数 次人「天文学者としての間重富」

浅井 允晶「間重富と『暦象考成』後編

- その入手をめぐる問題を中心に -」

【資料紹介】

酒井 一光「阪急電鉄株式会社神崎川変電所(旧館)の建築」

【論文】

野高 宏之「加島屋久右衛門と黄金茶碗」

【史料紹介】

中小路 純「河州東出戸村における享保期の年貢収取」

荒武賢一朗・片岡健

「東京大学法制史資料室所蔵

<大阪宗旨役所触扣>(下)」

その他

取り扱い書店 旭屋書店(梅田本店・天王寺MIO店・京都店)、ジュンク堂書店(大阪本店・難波店)、ユーゴー書店(阿倍野店)、中之島書店(大阪市役所地下)、四天王寺書林、大阪歴史博物館(なお、書店では消費税が加算されます)

通信販売も受けつけています。郵便局そなえつけの、青色の郵便振替用紙でご送金ください。

口座番号 00930-9-82241

加入者名 大阪市史料調査会

備考欄にご購入希望の号数と冊数をご記入ください。そのほか、くわしいことは、お問い合わせください。

また、大阪市史編纂所で直接販売もしています。

大阪市西区北堀江4-3-2 大阪市立中央図書館3階

(地下鉄千日前線・鶴見緑地線西長堀駅下車)

電話06-6539-3333・FAX06-6539-3330

承久の乱(1221年)ごろの渡辺湛という人物は、乱に後鳥羽上皇方の兵として参加していたが、逃亡して幕府に捕えられ、そののち幕府方として戦った遠藤氏の遠藤為俊に引き取られて、ようやく京都に戻ることができたと書かれています。しかし、この話は、類似する話が1254年に成立した『古今著聞集』という書物に収められていることと、「遠藤系図」が14世紀はじめごろに作られたことを考え合わせると、「遠藤系図」が作られた時点で創作されたものであった可能性が極めて高いといえます。また、14世紀の段階で、渡辺湛の子孫は、渡辺の支配を朝廷から認められており、実際には渡辺氏の立場の方が遠藤氏よりも強かったと考えられます。つまり、遠藤氏は、自らの立場が弱いことを自覚していたのであり、「遠藤系図」にはその裏返し気持が込められていたのです。

(生駒孝臣)

絵はがきでみる昔の大阪（6）

天保山灯台（明治30年代）

大阪市は平地がほとんどですが、山の付く地名として、大正区にある昭和山、鶴見緑地にある鶴見新山、生野区の御勝山、阿倍野区の聖天山、住吉区の帝塚山、天王寺区の茶臼山と真田山、そして港区の天保山などがあります。おおむね人工の山で、たとえば御勝山・聖天山・帝塚山の三つは古墳です。茶臼山も古墳といわれていましたが、近年の調査によると古墳ではない可能性があるそうです。また昭和山は昭和45年（1975）、鶴見新山は昭和58年（1983）にできています。

さて、天保山は天保2年（1831）に、安治川の川底を浚渫したときに、その掘りあげた土を盛り上げてできました。当初は10間（18メートル）ほどの高さがあり、樹木が植えられ、いろいろな施設も設けられて、一躍大阪の名所となりました。

ところが幕末になると、大阪湾の防備をはかるために砲台が建設され、景観が一変



しました。さらに、明治時代になると大阪湾に灯台の設置が強くもとめられ、明治5年（1872）にイギリス人のプラントンの設計で、木造四角形の灯台がつけられました。のち明治27年（1894）に木造六角形に改築され、明治43年（1910）12月まで点灯されて

います。明治20年代には砲台が取り払われ、その後に遊園地もできて、江戸時代の賑いを取り戻したことでしょう。

この写真に写っているのは2代目の灯台で、明治30年代後半のころの情景と思われます。手前に見えるのは渡し舟でしょうか、奥に見えるのは安治川口の南岸です。のどかな雰囲気漂う風景です。明治36年（1903）には築港大棧橋が完成し、日本最初の市電が築港と花園橋を結びました。まだ乗客は少なかったのですが、築港やこの附近で釣りをする人の足として重宝されました。

その後、地下水くみ上げにともなう地盤沈下もあって、現在では天保山の標高は海拔4.5メートルになってしまいましたが、そのため「日本一低い山」として、かえって有名になっています。（堀田暁生）

大阪市史編纂所では、所の仕事の紹介や、刊行物の案内などのため、ホームページを開設しています。アドレスは下記のとおりです。または主だった検索エンジンで、「大阪市史編纂所（おおさかししへんさんしょ）」でおさがしてください。

<http://www.oml.city.osaka.jp/hensansho/>